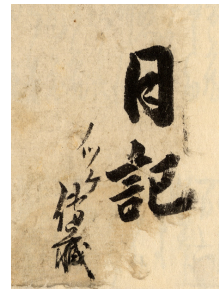


「加賀家文書」の調査研究から～その29

史料「日記 ノツケ 伝蔵」

～根室場所のアイヌを天然痘から救った貴重な記録からVI～



先月号では、種痘医師である「井上元長様」が、シヤリ（斜里）から清里峠を越えてシヘツ（標津）へ、安政五年（1858）十一月二十四日に到着し、メナシ（目梨）やヘツカイ（別海）での種痘の部分の原文をそのまま掲載しましたので、今月号はその様子を詳しく紹介したいと思います。

1. メナシやヘツカイでの種痘の様子（伝蔵の動向と種痘接種への付き添い）

「十一月十八日に『井上元長様』が、斜里から標津へ下山（清里峠を下って根室場所へ、標津～斜里間は、登山と表現していました）するとのことで、伝蔵は、標津の番家（根室下会所と言われた大きな建物）から呼び出しの手紙がきたので、根室へも連絡し、同月二十三日に、ノツケ（野付）を出て、大雪のためにイキタラウス（野付半島にある漁番家-アイヌ語で、笹ある処）に泊まり、翌日、標津の番家に到着しています。

※根室場所での十一月から十二月の業務や行事をみると、

旧暦の十一月には、すでに漁も終え、漁具の手入れ、山稼ぎ（漁船や漁番屋などの材の伐りだし等）薪の伐りだし（ニシンやマスは魚粕を生産するので、大量の薪を必要としました）を行っていました。

十二月には、①「漁勘定」（アイヌへの賃金は、その都度渡すのではなく、年に一回、漁勘定の時に渡すことになっていました。）②炭焼き③祭り④煤払い⑤餅つき⑥歳末⑦年越と続いたようです。

特に、「通辞」役（アイヌ語通訳以外にも、あらゆる仕事をこなし、支配人の代わりをも勤めました。）であった伝蔵は、多忙な日常業務に加え、種痘接種への対応を命じられますが、『日記』からは、次々と仕事をこなしている姿とその内面が見えてきます。

（1）十一月二十四日の『日記』から

「種痘の件については、子モロ（根室）からの御指図が来る迄、御控え下さる様お願いしたところ、お聞き届けて下さいました。種痘瘡（たねほうそう）の件は標津と茶志骨から 四、五人位差し出す積りです。」と記しています。標津へ着いた伝蔵は、『井上元長様』と今後の種痘接種について打合せをしたようです。

「子モロからの御指図が来る迄、」

①「子モロからの御指図」とは、当時、子モロには、会所に支配人・通辞、役所には金井・近藤・佐伯・名取の各氏が勤めていました。種痘接種は、箱館（函館）奉行の命によって医師が派遣されていたので、こうした人たちの指示を待つということです。

②御指図については、「子モロ土人種痘之儀ニ付申上候書付」（『久摺』第五集古文書紹介から）に詳しく、この史料によると、

ア、できればこの三か所（会所元（根室）・ホニライ（穂香）・ホロモシリ（幌茂尻））では種痘をしないでほしい、と支配人代の鉄蔵が伺書を差し出してきたので、やむをえず聞き届けたと、金井清三郎が書状で申して参りました。

イ、三か所のアイヌは種痘を拒んでいるので、来ることはないという清三郎の書状がありました。

ウ、役所に到着し、清三郎に談判しました。

エ、シヘツに元長が逗留している時も、こちらに来ないようにという要請の内通があったようです。

以上のことなどから、当時子モロ地方でも行き違いがあり、種痘実施の一端が理解出来ます。

追記 その28で「安政五年五月九日 近藤様井上様到着」とあるのは、前述した通り、釧路・厚岸で種痘をし、根室に着き、ここでも種痘をしたようですが詳細は不明です。

しかし、標津の茶志骨で種痘が行なわれたのは井上元長が標津に着いて、十日間後の十二月四日である。この間の種痘医師の動向は『日記ノツケ伝蔵』安政六年正月十八日の記録「乍恐見覚二而奉申上候」（次回以降で紹介します）によると、「雑病治療」「そう病治療」「腹痛」などの治療にあたったようです。一方、伝蔵は「漁勘定」の時期になり、十二月朔日はヘツカイ漁勘定、二日シヘツ着、子モロから手紙がくる。（この手紙の内容はわからないが、翌々日から種痘医師の井上様を同道して漁勘定に出ていることから、子モロからの指図があったものと思われる。）

（2）漁勘定・種痘の付き添い

- 十二月三日** シヘツ漁勘定、和人土人（アイヌ）が夜中まで酒盛りをし、賑やかだった。
- 同 四日** チャシコツ勘定、井上様も同道し、植え疱瘡の予定
- 同 五日** イチャニ 勘定、井上様も同道、付き添いは文作（種痘接種は？）
- 同 六日** チウルエ 勘定 **七日** クン子ヘツ 勘定 **八日** サキムイ 勘定
- 同 九日** ウエンヘツ 勘定
- 同 十日** 文作殿、ウエンヘツから帰り、伝蔵付き添い、井上様同所で種痘、ウエンヘツでの種痘をおえる。
- 同 十一日** 大風雪のために留まる。**同 十二日** サキムイは終り、クン子ヘツで種痘一宿する。
- 同 十三日** チウルエ 種痘が終り、一宿する。**同 十四日** イチャニ 種痘が終り、一宿する。
- 同 十五日** シヘツへお帰りになれる。
- 同 十六日** アイヌが揃ってないので、二十三日まで御留まりをお願いし、聞き届けられる。（その訳は記されていない。この後、伝蔵はシヘツに二十一日迄留まる。）
- 同二十一日** 井上様にお頼みしてノツケに出掛け、はなこさんに種痘をしていただく。
- 同二十二日** 野付湾内の氷を渡ってシヘツへ帰る。ヨン子ニクルの畑小屋で昼飯を差し上げる同所の井戸水も凍ってなく、雪の下の麦も青々として春の気配で喜ばしい。
- 同二十三日** シヘツに居るアイヌに種痘を済ませる。**同二十四日** 記なし
- 同二十五日** チャシコツに居るアイヌに種痘を済ませる。
- （当時、メナシと言われていた地方での疱瘡の接種が殆んど終ったことになる。）
- （この後、ヘツカイ・ホロモシリ・ホニライ・子モロ会所元だけとなる。）
- 二十六日** シヘツを出られ、ヘツカイ着。（夏場はコイトイから小舟で航行したが、陸路のだったようだ。）
- 二十七日** ヘツカイのアイヌ仁助を始めとしていさぎよく種痘を済ませ、アツウシヘツで一宿する。（仁助はヘツカイの庄屋後見役を勤めていた実力者であった）
- （文責・調査員 戸田峯雄）

別海町郷土資料館だより No.108

発行日 平成20年7月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

シリーズで「日記ノツケ伝蔵」を紹介しています。少し難しいところもありますが、じっくり読んでいただくと、種痘医師井上元長と加賀伝蔵の苦労が伝わります。当時のアイヌを守ろうとする貴重な資料、さらに分析を進めていきます。（石渡）